

SHOW HEY シネマルーム

★★★

SHIPPING ・ ニュース

2002 (平成14) 年4月1日鑑賞

Data

監督：ラッセ・ハルstrom

出演：ケヴィン・スペイシー／ジュ

リアン・ムーア／ジュディ・

デンチ／ケイト・ブランシェ

ット

<ショートコメント>

「 SHIPPING ・ ニュース 」とは、カナダの東にあるニューファンドランド島の中で書く「船に関するコラム」のこと。また原作は世界的ベストセラーとのこと。もちろん私はその原作を知らない。

映画のストーリーは、もともと自分に全く自信の持てない主人公クオイル（ケヴィン・スペイシー）が、妻にも裏切られ失意のどん底にあった時、娘と共に先祖達が生きてきたニューファンドランド島へわたり、そこで新聞記者としての仕事に就き、 SHIPPING ・ ニュースを書く中で、自分を見つめ直し、新たに生きていく希望を見出していくというもの。つまり人間の「心の旅を描いた感動作」とのふれこみだ。たしかに、そうかもしれない。

しかしこの映画は難しすぎる。映画では3つのシーンが何回か回想される。すなわち①クオイルの少年時代、父親から無理矢理、水の中に放り込まれて「死ぬ思い」をしながら泳ぎをたたき込まれた「原体験」②クオイルの先祖達がニューファンドランド島において、追われるように長いロープで家を引っ張っていく回想シーン、そして③海賊のように船を襲う回想シーンだ。

だから、こういう「呪縛」の下に、クオイルの人間性や人生観が形成されたことは一応理解できる。そして、それがニューファンドランド島で SHIPPING ・ ニュースを書きながら、厳しい自然と向き合い、島の人達との本当の心の触れ合いを体験する中で、人間としての本当の生き方を見つけていくというストーリーの狙いもわからないではない。しかし・・・全体として暗く、テーマが重い。

感動作であるということ是否定しないが、私の好みとしてはもう一つ・・・。
もっとも私の尊敬する弁護士にして、文化人である斎藤浩氏は、『おおさかの街51号』（おおさかの街編集部発行 2002年7月）において「観てよかったなああと心から思える映画は久しぶりである。」としてこの作品を絶賛している。それはそれでいいだろう。なぜな

ら人によって映画の見方は違うもの、また感動を覚えるかどうか違うもの、だから・・・。

2002 (平成14) 年8月26日記